

第 1 章

町勢の概要



伊礼原 C 遺跡

木製容器

縄文時代中期（約4,480年前）

北谷町の沿革と概況

北谷間切——九つの「むら」（安仁屋、北谷、桑江、平安山、砂辺、野国、屋良、嘉手納、山内）から成り立っていたが、尚貞王3年（寛文11年、西暦1671年）宜野湾間切創設の時に安仁屋を宜野湾間切に、山内を越來間切に編入し、残りの七つの「むら」を分割し、五つの「むら」（玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里）を新設し、計12の「むら」にしたといわれている。近代の北谷間切は、この12の「むら」から成り立っていた。「むら」は大部分が古くから集落を形成していたと思われるが、按司時代においては按司の攻伐と共に区域が変動し、王府時代になってからも王府の政策によって、間切の分割、創建が相次いだようである。

村制の施行——明治41年（西暦1908年）に特別町村制が布がれ12の「むら」はそれぞれ「字」となり、間切は「村」と改められた。行政の運営にあたる役場は当初字北谷に設置されたが、明治44年には当時の村の中央部に位置する字浜川に移設された。戦前までの北谷村は農村として栄え、特に米の産地として県下でも有名であった。しかし、第2次大戦を契機にして北谷村は大きく変貌していった。

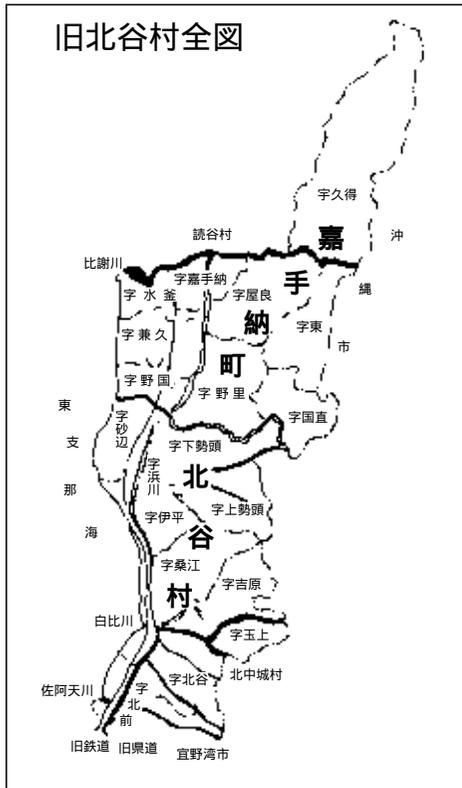
昭和20年4月、米軍の上陸地点となり、村全域が占領地となった。このため、村民は宜野座村や金武町などに避難し、そこに居住するようになった。終戦後もしばらくは村内の居住が許されなかったため、昭和21年4月、北谷村に隣接する越來村嘉間良（現在の沖縄市嘉間良）に仮役場を設け村の行政を開始した。戦後最初の村長は米軍によって任命された。同年10月、桃原地域の一部に居住が許されたため、役場も桃原に移転し、荒れ果てた村の復興と村民の受け入れを図るようになった。居住許可地域も嘉手納、謝苺と次第に拡大されたため各所に分散して避難していた村民も次々と村に戻って来た。

分村——ところが、米軍によって嘉手納飛行場が一方的に大幅拡張、使用されたために、村が完全に二分された。交通が発達していない当時としてはこれが行政を進める上で種々の障害となった。このため、村民の約7割が復帰した昭和23年12月4日、やむを得ず嘉手納地域が分村し、現在の嘉手納町が設置された。

北谷村——昭和25年、民政府の援助によって村庁舎が建築されることを契機に、役場も桃原から謝苺一区に移転した。昭和28年に北前、昭和29年に砂辺、浜川地域が返還された。昭和36年5月、字吉原10番地（謝苺二区）に役場を移転し、以来37年間にわたり行政の拠点として役割を果たした。

戦前、米の産地として県下にその名を馳せた字北谷や字北前の田畑は終戦と共に米軍によって埋められ、兵舎やハンビー飛行場が建設された。また、漁業が盛んであった字桑江地域も軍用地として接收され、極東一といわれる米軍病院が建設された。昭和51年にズケラン通信所、カシジ陸軍補助施設、昭和52年に砂辺補助施設、キャンプズケラン西表原が解放された。昭和45年、字上勢頭地域の一部（約7万坪）が解放され、昭和48年の『若夏国体』開催の際に、国道58号（浜川）からこの上勢頭地域を通り、沖縄市の運動公園に結ぶ県道23号線が建設された。昭和50年3月、この地域に公立保育所が建設され、昭和51年2月には中央公民館が完成、社会教育活動の中心として効果的に利用されている。同年4月には桑江区の東シナ海を見おろす高台に県立北谷高校が開校した。

町制を施行——昭和55年4月1日、町制を施行した。町の限りない発展を求めて、現在、行政と町民が一体となって「まちづくり」に励んでいる。

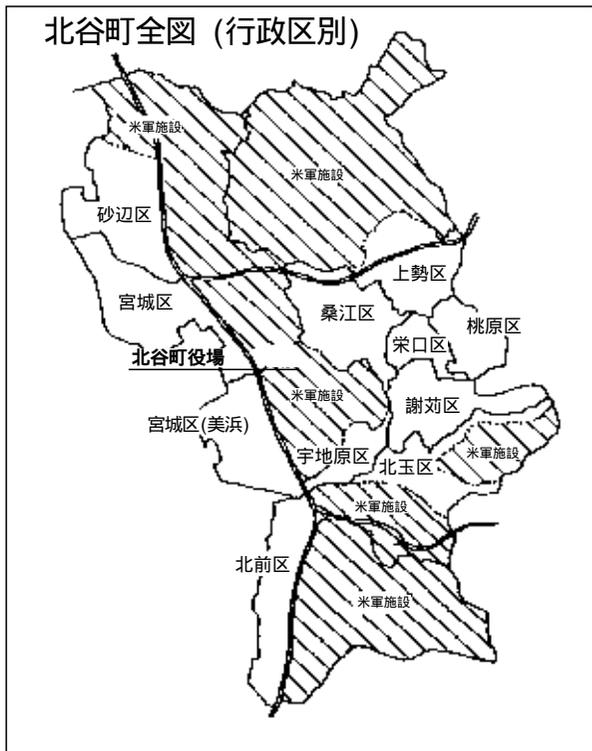


行政の拠点として、スタートした。

しかし、町発展のためにはどうしても解決しなければならない大きな課題がある。戦後50年経っても今なお面積の約56.4%が米軍用地に占められているため、町の都市、計画や住環境の整備が計画的に取組めない状況にある。

このため、町では「基地の返還なくして、町の発展はあり得ない。」ということで、米軍基地の計画的返還を強力に要求し、昭和56年12月30日、ハンビー飛行場とメイモスカラー地域が返還され、土地区画整理事業も完了し、新たな商業地域として確実に発展してきている。軍用地の返還によって広大な米軍基地によって分断されていた住民地域がつながり、都市（まち）づくりをしていく基盤ができた。また、それに伴い桑江地先公有水面埋め立て事業により、運動公園の整備を完了した。また、アメリカン・ビレッジ構想による民間活力の導入による「まちづくり」を強力に推し進め、個性のある「賑わいのある都市」へと発展しています。

平成10年5月、基地のフェンスに囲まれた現在の役場庁舎（字桑江226番地）に移転し、新たな



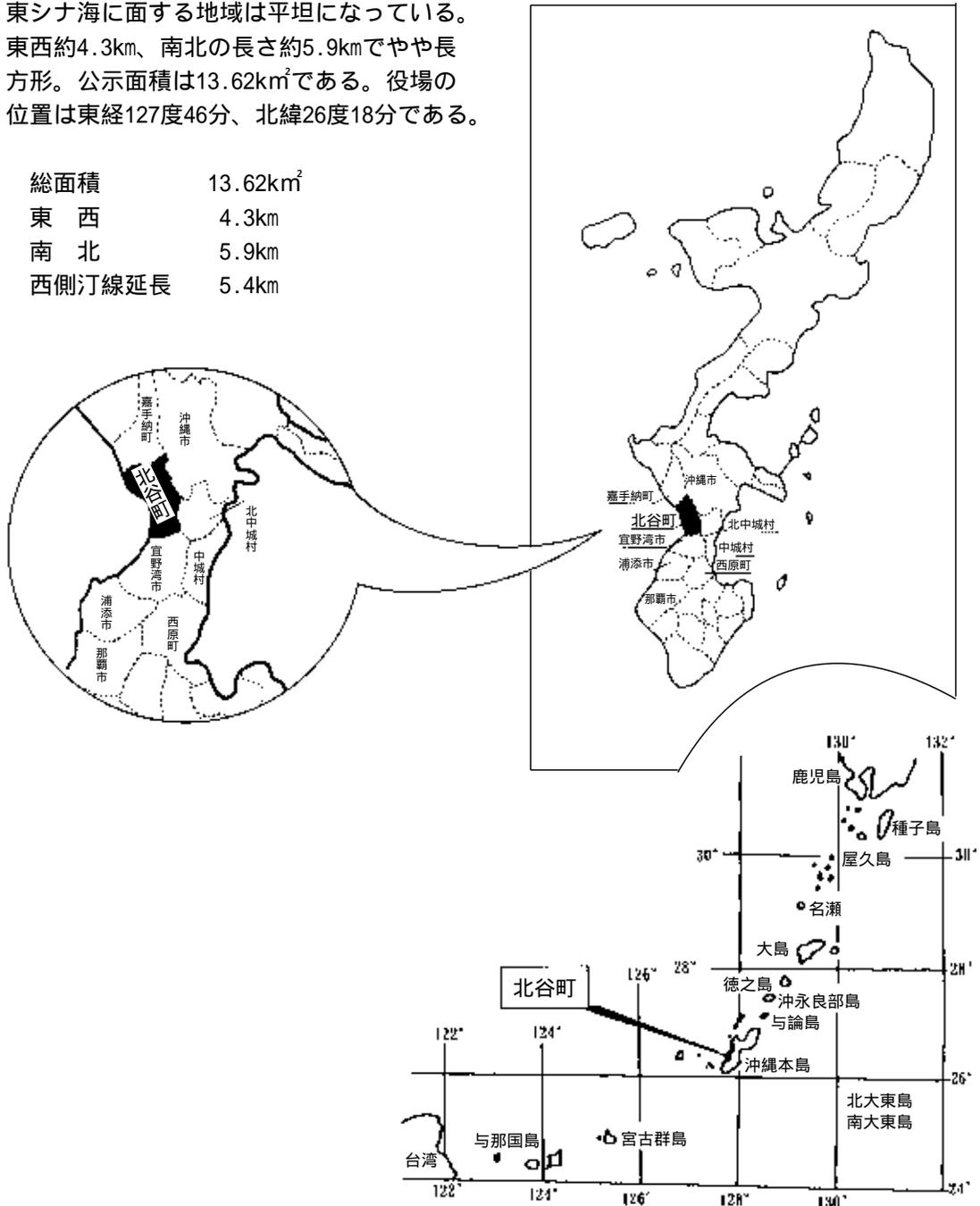
北谷町の位置・地勢・気象

本町は沖縄本島の中部の地に位置し、北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村に隣接し、南は宜野湾市に隣接している。西は全面が東シナ海に面しており、遥かに慶良間諸島が展望される。

地勢を東西の線に沿って見ると、東部から町のほぼ中央部までは全体として丘陵をなし、そこから傾斜をして西に向かうにしたがって次第に低くなっている。

東シナ海に面する地域は平坦になっている。東西約4.3km、南北の長さ約5.9kmでやや長方形。公示面積は13.62km²である。役場の位置は東経127度46分、北緯26度18分である。

総面積	13.62km ²
東西	4.3km
南北	5.9km
西側汀線延長	5.4km



土層および土質の状況

北谷町の土質は、珊瑚石灰土層、国頭礫層、泥灰岩土層、海性沖積土層から成り立っている。これを地域別に見ると、謝苅地域一帯は珊瑚石灰土層、上勢頭一帯は国頭礫層、玉上一帯は泥灰岩土層、北谷・北前一帯は海性沖積土層でできている。土性は壤土、埴土、埴壤土、砂壤土、砂土に大別される。最も多い土性は埴土、これは謝苅、玉上、砂辺、浜川地域に多く見られる。桃原地域は壤土、奈留川あたりは埴壤土でできている。海岸地域は砂土からなっている。

気 象

亜熱帯性気候で四季を通じて温暖である。年平均気温は22度程度で、冬の期間が極めて短く、春から夏にかけて雨量が多い。平均湿度は75%前後で夏から秋にかけて、沖縄県全体が亜熱帯性低気圧の進路となる。

現 況

町制施行	昭和55年（1980年）4月1日
町面積	13.62 km ²
人口	25,769人（平成13年12月31日現在）
	男 12,531人
	女 13,238人
世帯数	8,623世帯